

令和2年度 学校評価本評価結果と分析

令和3年2月8日



仙台市立六郷小学校

このように見てください

◆それぞれのアンケート項目を下の六つの大項目に区分し、大項目ごとの分析・考察を実施しました。

- 1 総合観点
- 2 新しい学校生活様式
- 3 協働型学校評価
- 4 四つの習慣形成
- 5 コロナに負けない力の育成(学校編・家庭編)
- 6 学校・家庭・地域連携

◆児童アンケート結果を中心に分析しています。

◆肯定率(「はい」「ほぼはい」を合わせた割合)80%以上を目標値とし、達成できた項目に対しては「概ね満足な状態」と判断しています。



●目標値を達成できた内容を表しています。



●目標値が達成できなかった項目や、立ち止まって考える必要がある内容を表しています。

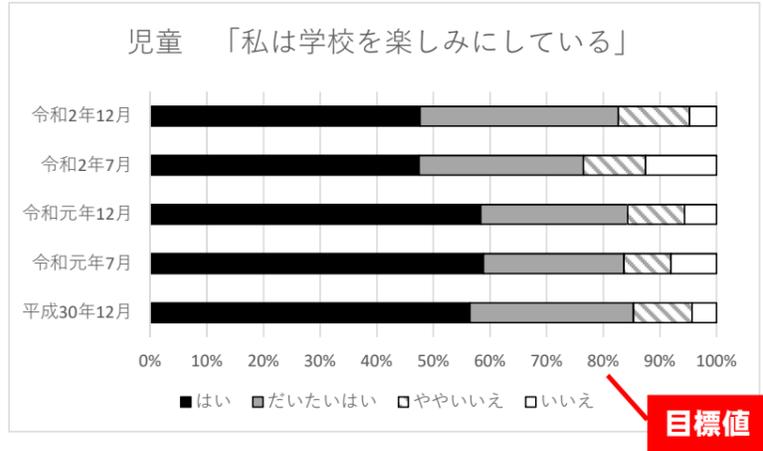


●学校の考えや改善策、お願いなどの内容を表しています。

総合観点「学校は楽しい?」



この項目の児童アンケート肯定率は82.7%で目標値を達成しました。また、7月中間評価との比較でも、肯定率が向上しています。学校再開後、本校が大切にしてきた「人との関わり」と「子供自らが共に創り出す活動」が、コロナ禍の中にあっても「学校の楽しさ」を感じさせる力になったのではないかと考えます。



人との関わり・共に創り出す活動の重視



●学校休校中からスタートしていた「六郷体操」。学校再開後は5年生が中心となり、朝に「体操の時間」を設定して全校で親しむものになりました。また、体育の時間の準備運動としても定着していきます。その後、体育委員会発案で「六郷体操コンクール」というイベントが立ち上がります。体操の一部分を学年で創ってみようというこの取組では、見事5年生が優勝となり、六郷フェスティバルでの「新六郷体操」発表につながりました。

●六郷フェスティバルは、児童会と実行委員会が主体となって進めた行事です。テーマ「心一つに伝統つなぐ」も子供たちの発案によるものです。フェスティバル実施に当たっては、各委員会が広報や会場準備などの役割を持ち、見えなところで、この行事を支えました。また、6年生が5年生に黒潮太鼓を教えるなど、上学年から下学年への「技の伝承」の時間もありました。まさに「心一つに伝統つなぐ」というテーマそのもの。この行事も、人と関わり、自分たちで創り出す行事でありました。



児童アンケートを学年別に見ると、「学校は楽しいか」という質問に対する肯定率は、下学年で高いものの上学年では伸び悩んでいることが分かります。では、「子供たちにとって楽しい学校」とはどんな学校なのか。ここでは、このことについて考えてみたいと思います。

「楽しさ」の要因 「徳・知・体」バランスのとれた教育

◆徳 育「仲間づくり」

- ・他者理解・他者尊重・協働する力
- ・人間関係形成力(含む協働型学校評価目標)



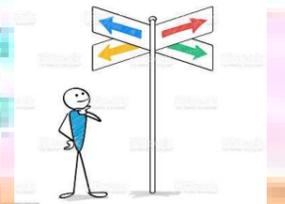
◆知 育「学びづくり」

- ・学ぼうとする意欲・粘り強さ
- ・主体的・対話的な学び



◆体 育「自分磨き」

- ・自分理解に基づく向上心・行動力
- ・自己決定力・自己コントロール力



学校は子供たちに「徳育・知育・体育」という三つの教育を行うところです。子供たちの日々の学校生活は、この三つの教育の中にあるということが出来ます。そして、この三つの教育はバランスよく子供たちに提供されなければなりません。なぜなら、この三つの力を持つことが、子供たちが将来、社会の中で自己実現を図っていくために必要だからです。

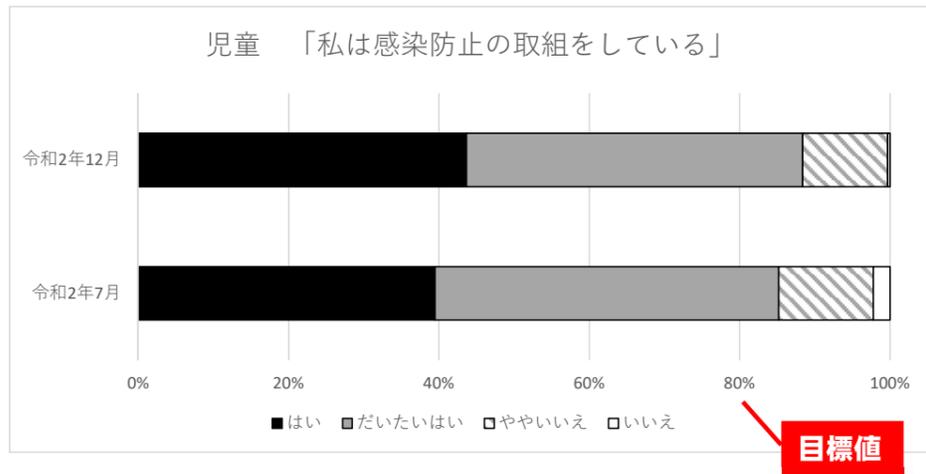
ここに、「知」に優れたお子さんがいるとします。学習に対して意欲的で家庭学習にも自ら積極的に取り組みます。授業でもよく考え進んで発言し、他者の意見に耳を傾けながら話し合いではいつもグループを上手にまとめることができます。ところが、このお子さんに友達がなかったとしたら・・・。「学校はたのしいですか?」という問いかけに「はい」と笑顔で答えるでしょうか。

「学校が楽しい」と答える子供たちにしていくためには、この三つの教育が一つも欠けることなく、確実に子供たちの生きる力になることが大切です。何かを欠いたままでは、「楽しい学校」にはつながりません。総合観点「学校は楽しい?」は、このことについての子供たちの今を知る指標です。本校は、次年度も三つの教育の一層の充実に向けて努力を重ねてまいります。

2 新しい学校生活様式



「感染防止の取組をしているか」という児童アンケートの肯定率は88.4%で目標値を達成しました。また、7月中間評価との比較でも肯定率が向上し、「いいえ」と答えた子供は少なくなっています。大人の社会では「コロナ疲れ」から、感染防止に対する「ゆるみ」が見られるという報道もありますが、子供たちの意識の高さと継続する力の確かさに感心させられます。



感染防止 学校の取組・子供たちの姿



●いつもの給食調理室見学も、今年度はガラス越しに少人数での実施となりました。その中にも、食い入るように室内を見る子供たちの真剣な姿がありました。

●家庭科の調理実習は、実施方法について校内で慎重に検討しました。まず、実習人数を通常の半数にすることで、密集を回避すること。そして、調理量を少なくすることで、調理時間の短縮を図ること。もちろん、調理に係る各場面における手洗いや消毒も徹底しました。いつも以上に様々な制限がある中、それでも子供たちは久しぶりの調理実習の時間を楽しみ、実りある学習を展開することができました。



この子供たちだからできた 宿泊学習

学校再開当初、小学生に「三密の回避」「マスク着用」「手洗い」といった基本的な感染対策が維持できるのかといった心配もありました。しかし、子供たちは本当によく頑張っていると思います。この子供たちの頑張りがあったからこそ、実施に踏み切れた行事が「野外活動」「修学旅行」でした。



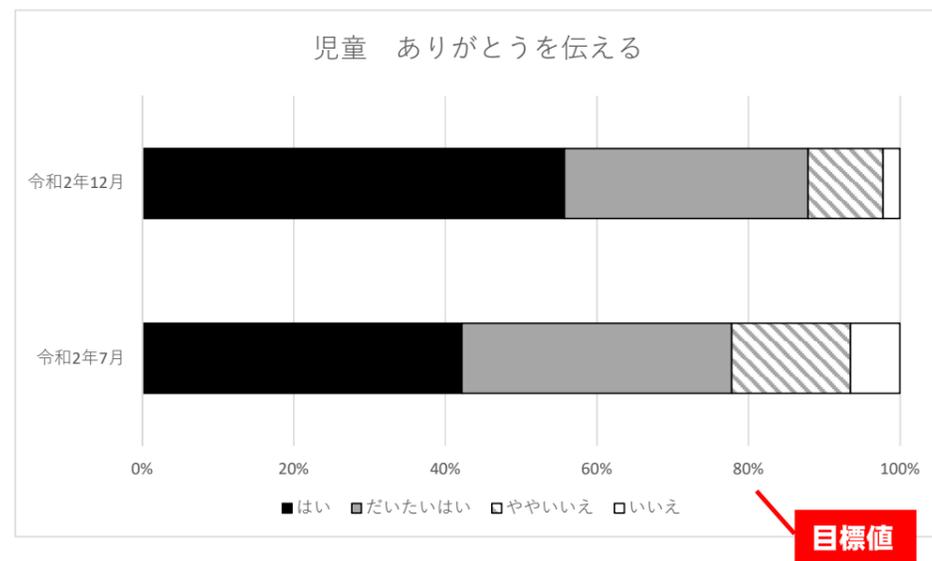
貸し切りバスでの長時間移動や集団での食事、宿泊など、「野外活動」にも「修学旅行」にも、大きな感染のリスクがあります。どんなに教員が目光らせても、見学・宿泊施設が感染を抑える仕組みを高く作っても、子供たち自身が自分たちで意識し行動しなければ、感染を防ぐことはできません。

これらの行事に参加した高学年の子供たちの意識、行動は素晴らしいものでした。と同時に、「楽しむべきところは、感染防止策を取りながら楽しむ」ことができる子供たちの姿に感心させられました。そして、この実績があったから、その後の家庭科調理実習も実施に踏み切ることができたのです。

こうした子供たちの姿を育てているのは、日々行われる教育活動の中での「新しい学校生活様式」です。次年度も、しっかりと継続していきます。また、その中にも「こうすれば楽しめる」という楽しみ方についても、子供たちとともに知恵を絞っていききたいと思います。



「進んでありがとうを伝える」という児童アンケートの肯定率は87.4%で目標値を達成しました。また、7月中旬評価との比較でも肯定率が向上しています。また、「他の人にありがとうを言われるようなことができたか」という項目に対しても86.3%という高い肯定率でした。学年による肯定率の乖離も見られません。子供たちは協働型学校評価目標である「ありがとうのある生活」を創り、発信しています。



交流から生まれた思いやりが 「ありがとう」を生む



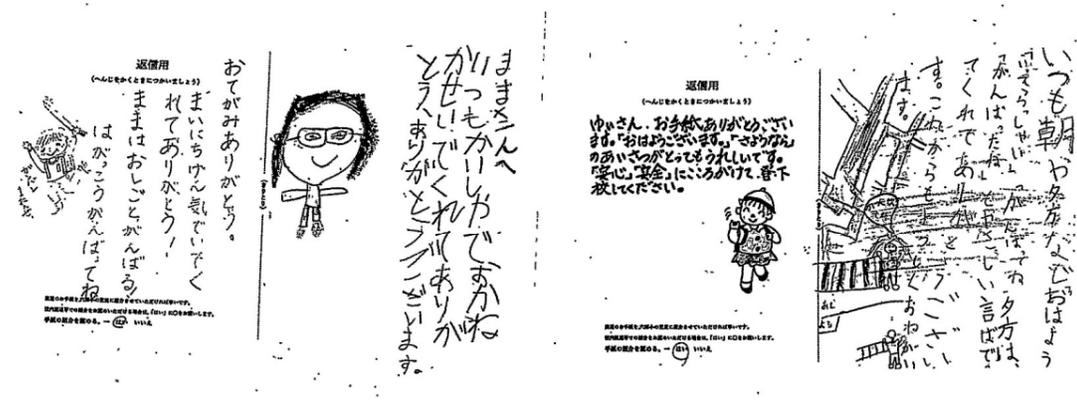
●写真左は、6月に行った1年生を迎える会の一コマです。感染防止策として、1年・6年の学級単位の交流となりました。このつながりは、11月の六郷フェスティバルにまでつながります。写真右は、1年生を迎える会で交流した6年2組が1年2組に対して、メッセージボードを作成し、応援している様子です。様々な交流が絆を生み、絆から思いやりが生まれ、感謝につながる……。こんな場面を大切にしていきたいものです。



●「六郷フェスティバル」に向けて、伝統をつなぐ子供たち。6年から5年へ「黒潮太鼓」、3年から2年へ「よさこい」。こうした交流も自然な「ありがとう」を生み出しています。

より深く・より広く サンキューレタープロジェクト

ありがとうに気付く力を、より深く・より広く高めていくことを目標に、今年度は「サンキューレタープロジェクト」に取り組みました。この取組は、「ありがとう」の主体者である子供たち自身の手に委ねたいという願いから、ボランティア委員会が、呼び掛けや全校から寄せられるサンキューレター仕分け作業などの仕事を行ってくれました。



●今回の「サンキューレタープロジェクト」の中で、低学年では家族に宛てた手紙が多く見られました。大好きな家族に手紙を書くこと自体が楽しいという気持ちで、手紙から感じられました。また、家族の方もたっぴりと愛情の詰まった返事を返していただきました。中学年の子供たちは、以前の担任や給食室、習い事の先生やコーチなどに宛てた手紙が多く、感謝を伝える相手に広がりを感じられました。以前の担任から返事を受け取ったときの子供たちの表情は、とても印象的でした。高学年は、やや気恥ずかしさを感じながらも、友

達やスポーツチームの他校の仲間などへ感謝の手紙を書く様子が見られました。また、返事をもらうことのうれさを静かに味わっていました。さらに、学校に関わるボランティアの方々にも手紙を書く児童が多くみられました。自分たちが多くの人に支えられていることについて、じっくり振り返る機会になりました。

●六郷フェスティバルの保護者用の感想用紙に記載されていた内容です。フェスティバルを参観したあるお母さんが、帰宅したお子さんに「今日は(フェスティバル)ありがとう」と声を掛けました。すると、このお子さんは「お母さんこそ、いつもありがとう」という言葉を返したのだそうです。何気ない言葉のやりとりの中に、温かい雰囲気を感じます。「ありがとうのある生活」大切にしていきたいものです。



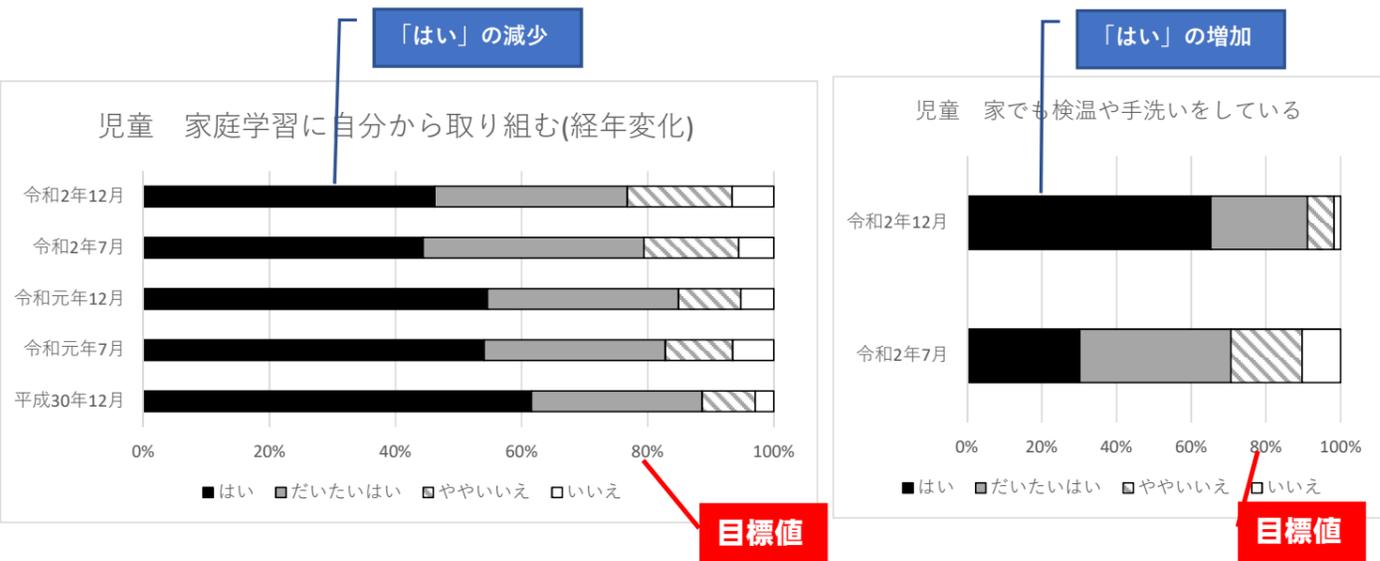
「その言葉遣い」本当に大丈夫ですか？

●児童アンケート「場に応じた言葉遣いができていますか」の肯定率83.9%です。これは、7月の中間評価との比較でも向上しています。一方、教職員評価では「子供たちの言葉遣い」に対する肯定率は37.9%と、全項目の中で最も低い数値になりました。教職員が懸念するのは子供同士の場面、そして子供が興奮したときに使う言葉なのです。協働型学校評価目標では、「求めたい言語環境」として、「愛情・信頼の言葉(おはよう・さようなら等)」「感謝の言葉(ありがとう=本年度重点)」「反省の言葉(ごめんなさい)」「称賛の言葉(すごいね・頑張ったね)」を推奨するとともに、「節度ある言葉遣い」を掲げています。「ありがとう」で大きな成長を見せている子供たちに、改めて「使うべきではない言葉」「使ってはいけない言葉」を伝えていくことが大切です。御家庭でも、お子さんの日頃の言葉遣いに気を止め、不適切なときには教えてあげるようにしてください。

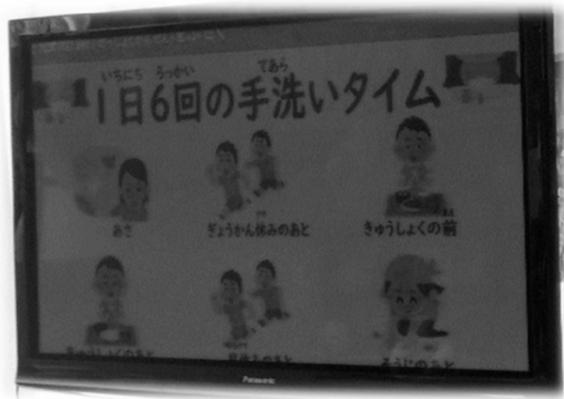
4 四つの習慣形成



「家庭学習に自分から取り組む」「お手伝いを進んでする」という児童アンケートの肯定率は、それぞれ76.8%、74.3%で目標値を達成できませんでした。また、「家庭学習」に関する経年変化からは、「自分から取り組む(はい)」と答えた子供が年々減少していることがわかります。一方、同じ家庭で行う習慣でありながら「検温・手洗い」の実施については、7月中間評価比較を大きく上回り、児童アンケート項目の中で最も高い肯定率91.1%となり、「はい」と答えた子は60%以上となっています。



息苦しくてもマスク・水は冷たくても手洗い励行



●「学校生活様式」のページで紹介したように、学校における子供たちは「感染防止の取組」を今も一生懸命実行し続けています。冬になって水が冷たくなってもしっかりと手を洗い、当たり前のようにマスクを着けています。給食時間は、黙って食事をしています。おそらく、家庭においても手洗いや検温の習慣が身に付いてきていることと思います。なぜ、ここまでできるのでしょうか。それは「感染防止の取組」が、自分にとって、家族にとって大切だと感じているからではないでしょうか。

●では、家庭学習はどうでしょう。勉強もまた自分にとって大切な取組です。また「自分から家庭学習に取り組めるようになってほしい」という家族の願いを、子供たちも知っているはずですが。「感染防止の取組」の必要性和「家庭学習の取組」の必要性に大きな差はないのです。今回、「家庭学習に自分から取り組む」という質問に「はい」と答えられた子供が50%以下であること、年を重ねるにつれて肯定率が下がり続けている事実、大人が真剣に向き合う必要があると感じます。

自分磨き すべきことと向き合える力を子供たちへ

今、子供たちの周りには、魅力的なものがあふれています。インターネット、SNS、ネットゲーム……。そのどれもが大人にとっても楽しく、時間を忘れて没頭してしまうものであることでしょう。しかし、多くの大人はだからといって仕事を休んだり、食事を作らなかつたりはしません。「すべきこと」と「楽しいこと」を両立しようと工夫するからです。

今、子供たちに必要な力は、この「すべきこと」と「楽しいこと」を両立できる力です。家庭学習の問題も、「すべきことと向き合える力」を育成することで解決できる問題かもしれません。

「すべきことと向き合える力」は、単に家庭学習の取組にとどまる力ではありません。これから大人になっていく子供たちが社会で生き抜いていくために必須の力であると考えます。



両立



●「すべきことと向き合うことができる力」を育成していくためには、まず子供自身が目の前にあることを「しなければ」「してよかった」と思わなければなりません。子供の近くにいる大人の役割は、子供に「させる」ことにとどまりません。「すべきこと」に取り組む際の「環境づくり」と、取り組んだことによる成果への「評価」が大人の果たす役割ということが出来ます。本校では、生活目標の実践に当たって「自ら行動目標を立て実行し振り返る」という取組を推進しています。また、次年度から全校一斉の定期漢字テスト「六郷漢字チャレンジ(六チャレ)」を実施する予定です。いずれの取組も、子供自身が「すべきことと向き合う力」を高めるための取組です。全校統一という形での「環境づくり」と「どのように取り組んだか」という「過程の評価」を大切にしながら、子供たちの「向き合う力」を高めていきたいと思ひます。

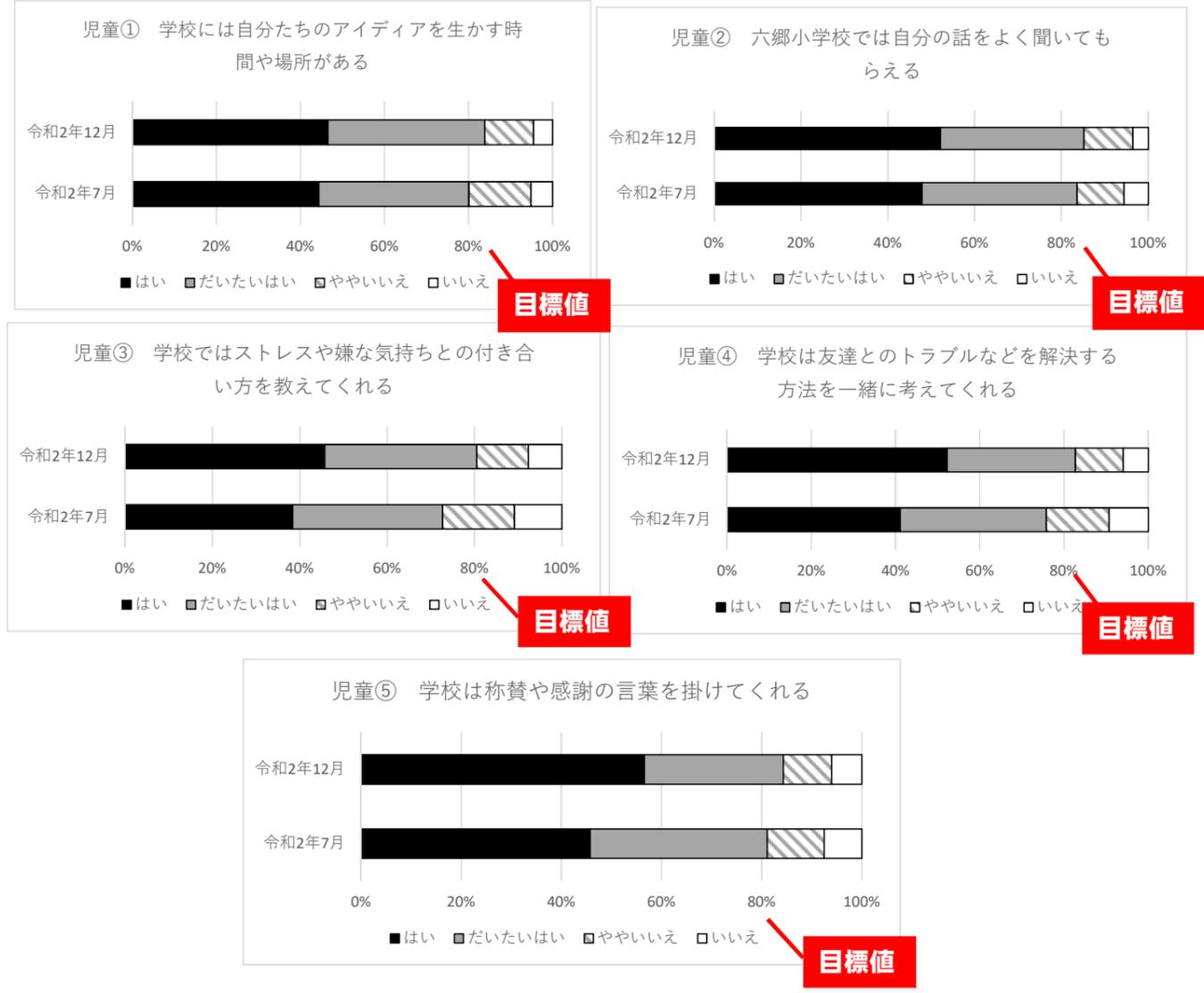
5 コロナに負けない力(学校編)



コロナに負けない力を付けるために学校が重視した五つの取組はすべて目標値を達成することができました。また7月中間評価比較でも肯定率の向上が見られます。

- ①アイデアを生かす場がある(83.9%)
- ②担任との対話(84.9%)
- ③ストレスとの向き合い方指導(80.6%)
- ④トラブル解決方法助言(82.7%)
- ⑤教師からの称賛の言葉(84.3%)

一方で、③④項目については、学年ごとに肯定率のばらつきが見られました。



今年度はこんな取組も行いました



●感染状況を踏まえ、一時停止していた委員会活動。今年度の委員会再開に当たっては、従来のやり方にとらわれず、希望参加制を取り入れてみました。子供たちは募集ポスターの呼び掛けをもとに、「どんな委員会なら自分の個性が発揮できるのか」を考え、自己決定していきました。こうして決まった各委員会の主体的な活躍は、通常の委員会活動の仕事はもちろん、「六郷フェスティバル」「サンキューレタープロジェクト」など様々な場面で見られました。

子供たちのアイデアが実現できる学校に



- 写真左上は、図書委員会による今年度の図書館祭りの告知放送の様子です。また、写真右上は児童会によるイベント「30秒動画大会」の様子です。このイベントは、いじめ防止のスローガン「きずな深めて笑顔を増やそう」を受け、計画委員会が主催しました。各学級から個性あふれる大爆笑動画を、校内放送を使ってみんなで視聴しました。(あまりにも素晴らしいので、何かの機会に保護者の皆様に御覧いただく期待を持ちたいと思っています。)写真下は、6年1組が学校を代表して行った七郷小学校6年生との「ズーム交流会」の写真です。この企画も子供たちの「やってみたい」から実現したものでした。
- 子供たちの「こんなことをしてみたい」というアイデアは、とても自由で様々です。こうした子供たちのアイデアを生かした取組が「コロナに負けない力(コロナの中でも喜びや楽しみを創造できる力)」につながると思います。子供たちのアイデアを生かす場所や時間の設定は、次年度も継続していきたいと思ひます。



●さて、子供たちは安定した楽しい生活を常に送っているかという、必ずしもそうとばかりは言えません。「コロナ不安」はもちろん、学校という集団生活の中で、生身の人間同士が暮らしていれば、「ストレス」や「トラブル」はつきものです。これらのものどうつき合っていくか、それを指導することもまた学校はもちろん、大人の役割ということができると思ひます。

●今回の児童アンケートでは「ストレス」や「トラブル」への支援について、肯定率に学年ごとのばらつきが見られました。今後は、計画的な指導・支援の機会を持ちつつも、より「子供たちの今」に即した柔軟でタイムリーな指導ができるようにしていきたいと思います。そのためにも、「子供たちとの対話」の機会を一層重視していきます。

5 コロナに負けない力(家庭編)



コロナに負けない力(家庭編)として設定した3項目すべてが目標値を達成することができました。また、学年による肯定率の乖離もありませんでした。

- ①家庭での対話(肯定率90.2%) ②トラブルの解決方法助言(肯定率86.0%)
③家族からの称賛の言葉(88.8%)

この中でも①の項目は、児童アンケートの中でも第2位の高い肯定率となっています。コロナ禍の中、保護者の方々との対話が、子供たちの「安心」に大きな役割を果たしていたことが分かります。

必ず最後に愛は勝つ 御家庭の御協力に感謝



●写真上は、学校再開直後の子供たちの登校の様子です。また、写真下は学校再開前に行った教科書配布の様子です。教科書配布の際には、「先生方も頑張ってください」などのたくさんの励ましの言葉を掛けていただきました。学校にとって、本当にうれしく、元気の出る機会でした。学校再開直後は、子供たちにつきそう保護者の方も多く見られました。保護者の皆様にも少なからず不安があったことと思います。皆様の大切な子供たちを守るため、これからも学校は精一杯頑張っていきます。



コロナ終息の出口が見えない中、これからも子供たちの学校生活が続きます。「コロナに負けない力」を付けていくための家庭における「対話・相談・称賛」の働き掛けを、引き続きお願いいたします。

また、本校では次年度も、コロナ対策をしっかりと行いながら、保護者の皆様への情報発信に努めてまいります。



6 学校・家庭・地域の連携

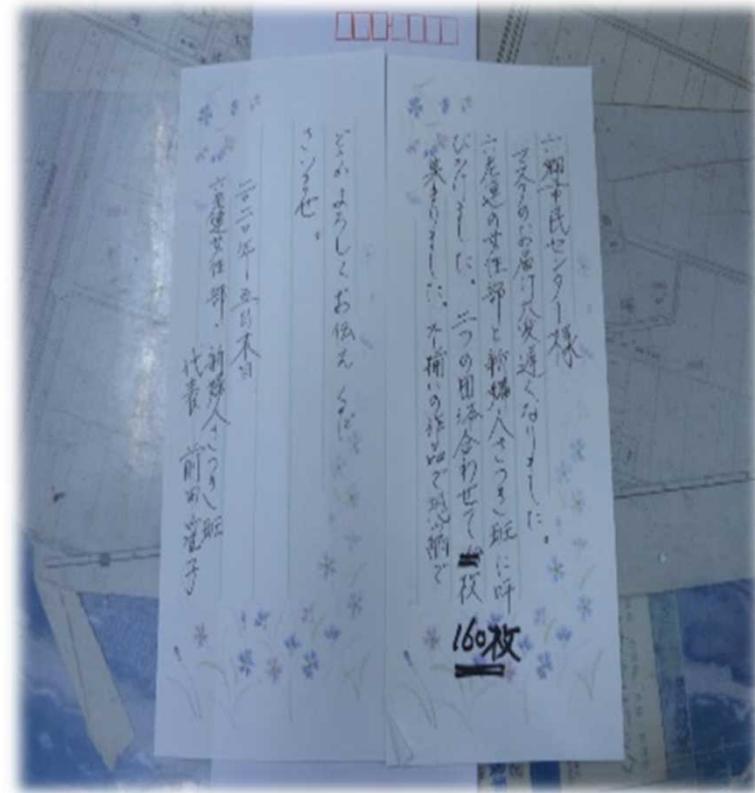


学校・家庭・地域の連携に関する三つの項目すべてが目標値を達成することができました。

- ①保護者アンケート「学校からの対話の機会」(肯定率93.5%)
- ②地域アンケート「子供への体験の場の提供」(肯定率81.5%)
- ③地域アンケート「学校からの対話の機会」(肯定率82.8%)

コロナ禍の中にあっても、様々な形で御協力いただいた保護者・地域の皆様に心から感謝いたします。

予防対策を取って 体験・地域との交流



コロナ禍によって様々な体験・交流活動に制限が加わる中、3年・5年の枝豆と米作り体験は、一部実施することができました。地域で御協力いただいている皆様に深く感謝申し上げます。また、中間評価でも紹介した地域から子供たちへの手作りマスクのプレゼントも、本当にありがたいできごとでした。学校では、今後も国・県・市からの指示に基づき、「できること・できないこと」についての情報を積極的に発信してまいります。また、HPや各種お便り、ブログなどを通して計画や実施後の子供たちの様子をお伝えできるようにしていきます。形は少し変わりますが、新しい方法を使いながら、一層の家庭・地域連携を進めていけるよう努力していきたく思います。

